



TITLE:

<批評・紹介>重近啓樹著 秦漢税役 體系の研究

AUTHOR(S):

大津, 透

CITATION:

大津, 透. <批評・紹介>重近啓樹著 秦漢税役體系の研究. 東洋史研究
2000, 58(4): 761-768

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155270>

RIGHT:

批評・紹介

重近啓樹著

秦漢税役體系の研究

大津透

第七章 漢代の復除（一九八七年）

附論一 秦の内史をめぐる諸問題（一九九五年）

二 秦漢帝國と豪族（一九九八年）

本書は、秦漢時代の一般民衆にとって國家や國家支配がいかなる意味をもつものであったかを、税役制度、その實態や變化の検討によって具體的に考察しようとしたものである。著者重近啓樹氏が一九九四年に明治大學に提出した學位論文（主査は堀敏一氏）が根幹であるが、その後發表されたものも含め約十篇の論考をもとにして構成されている。まず目次と舊稿の發表年次だけを列挙しておく。

序章 秦漢の國家と農民（一部一九七九年）

第一章 公田と假作をめぐる諸問題（一九八八年・一九八九年）

第二章 商人とその負擔（一九九〇年）

第三章 算賦制の起源と展開（一九八四年）

第四章 徭役の諸形態（一九九〇年）

第五章 兵制をめぐる諸問題（一九九九年）

第六章 兵制の研究——地方常備軍制を中心に——（一九八六年）

なお、評者は、日本古代史を専攻している者であり、その関連で隋唐の律令制度について考えたことはあるが、秦漢史については學生程度の知識しかもたない。したがって當該書の書評の任には、適否の議論以前であり、依頼の手紙をうけとった時は眼を疑った。即時にお断りするつもりだったのだが、編集委員會から秦漢史も少しは勉強した方がいいと自分の不勉強を非難されているような後ろめたさがあり、またタコツボ化している學界状況では、全く他分野の人間が讀むということ自體何らかの意味もあるように思った。日本古代史を勉強していると、律令法の母法である隋唐に目をやるのだが、制度の歴史的段階としては秦漢に、社會としてはさらに前の春秋・戰國あたりに共通点があると考えられよう。ここでは、そうした素人の、また限定された問題意識から紹介を試みることとした。この點、何よりも著者に對して失禮となったことを、あらかじめおわびしておきたい。

二

人々はなぜ税役を負擔したのかを問う時には、支配の正當性が問題になるが、國家がはたす「共同體」的機能が重要であるとして、序章ではその諸側面を概観している。

土地所有制については、秦律で民の田を「受田」と呼んでいることから國家の耕地に對する一定の權利が存在したとし、春秋中期以

降、國家や貴族による開發が進み授田制が行なわれ、商鞅第一次變法では田宅等の「名田」制、「名有」制が成立し、第二次變法で阡陌制と核家族への授田が進む。こうした國家的土地開發と並んで治水灌漑施設の建設が進み、農地に對する國家の權利が重要な位置を占めるが、一方で、漢代に土地賣買が進展するように、小農民の個別經營における主體性が強化されてくる。次に國家の再生産への關與として、縣が勞働力を編成、徴發し、また鐵器や種子などの民への貸借が行なわれたこと、山澤の管理などをあげ、農民の存立はこうした國家の勸農機能を前提として可能になったとする。そして古い（アジア的）共同體が解體して擬制的な「國家的共同體」へ再編される過程は、同時に個人身身的支配關係の創出過程でもあると述べている。

前漢の財政は、周知のように、大司農の國家財政と少府の管轄する帝室財政に區別される。郡縣制的農民把握を基礎とする前者に比し、山澤の税、公田收入、市井つまり商工業への税からなる後者の方が大きな比重をもち、戰國・前漢の専制君主權力の形成においては郡縣制的農民把握による以外の後者の收入が大きな役割を果たしたとして、第一・二章で検討している。

第一章では公田をとりあげる。その所屬について、秦・前漢では公田は少府だけでなく中央・地方の諸官府に所屬しており、從來指摘されなかった、郡縣所屬の公田が郡縣の獨自財源として相當の意味をもち、前漢中頃までの郡縣制成立過程において財政的意義をもったことを明らかにする。經營形態は、武帝・昭帝期までは奴婢・刑徒を役する直接經營が主流を占めたが、その後は貧民や流民への公田假與や公田の民田・私田化がなされ、また假作の假（賃賃

料）は田租と同じ低率だったとする。公田假作は、從來豪族の大地所有と關連して論じられてきたが、公田私田とも漢代の假作は、一年限りの不安定なもので、土地を媒介とする支配隸屬關係は當時一般に未發達であったことを解明した。

第二章では、戰國秦・王莽期の商人をとり上げる。身分としては、七科誼という下層身分に入り、現に市籍ある商人の土地所有は法的に禁止されていたことをのべ、市籍ある專業商人や市で販賣する一般農民から、申告賣上額にもとづき市吏が毎日市租を徴收し、市制・市籍を通じて國家は商業・商人を統制した。武帝期以後、市制の枠外の商業が擴大する中で、算緡錢や貢法が作られ、前者は商工業者の營業資産に對する特別財産税であるが、法的には土地所有はなお禁じられていた。商人支配の基礎となる市籍は、一般の郷戶籍と區別して商人の家族を登録したものだとし、兵役・徭役義務は免除されたとする。帝室財政と國家財政とが二分されるという系統を考えれば、市籍と一般戶籍との對象が異なるのは説得的である。隋唐律令法でも商人は市籍に登録されるが、その起源はそれが帝室財政に屬したことによるのだろう。

第三章以下で個別税目が検討されるが、先に全體像に關わる附論をとり上げる。附論Ⅰでは、秦の内史をとり上げる。周では王の側近、漢代には關中統治の官となる内史については、雲夢秦簡の出土により多くの研究がなされ、漢の治粟内史につながる中央財政官、漢の内史と同じ京師を治める官、双方の性格をもつ官など説が分かれる。著者は、縣から内史への上計時の計簿の上申、および縣・都官からの各種簿籍の上申の規定をとり上げ、縣倉の穀物等の出納を上計を通じて把握していることから、内史は、關中諸縣の計簿を一

括して受領し、縣に對する賞罰考課を行なつたとする。さらに内史と太倉・大内との關係について、漢代には郡國から大司農に錢穀・賦稅の未納が上申されたが、秦漢では内史に稻の生育狀況が報告され、縣から太倉に食糧受給者簿が報告されることから、内史は朝廷の中央官であり縣倉を統轄し、太倉はその下で實務を擔當し、大内も内史屬官として縣や都官の公器・衣服を管掌したと結論づける。秦の關中支配では、縣が中心の機構であり、中央官府がそれを分擔して統轄し（土木は邦司空、軍事は中尉など）、内史は關中諸縣に對する全般的な監督權を計簿の受理を通じて握つたため、「内史雜律」には廣汎な權限が規定され、秦統一後、未分化な王國的官制としての内史が郡縣制整備とともに京師統治の官として成立するとの見通しをのべている。

附論二では、秦漢帝國の支配體制の中での豪族の位置づけについて、豪族の發展と國家支配や郷里社會の變化について概観する。中央政府では國全體に及ぶ行政官廳が未發達な一方で、地方行政の中心にあったのは縣で、舊來の都市國家體制を繼承し、また戰國以降の開發により新開地にも新設され、令・尉・丞・各曹の舊夫以下の充實した機構をもつた。一縣は平均四郷（縣の出先機關で吏がいる）で、その下に百戸標準の里がおかれ、里内の有力農民が里正に任ぜられた。郡は元來征服地に對する軍政機關で、景帝以前は地方行政官府としては未熟だった。個別人身支配とされる稅役體系は、縣により實現される國家的共同體的機能に支えられて保たれた。秦は、商鞅變法により軍功による身分秩序を作り、田宅授與や官吏任用資格を與え、新興豪族を君主權力に結びつけていくことで舊來の貴族制的秩序を克服していった。地方では、小農民の廣汎な存在の

上に、縣三老にみられるように縣單位の縣豪族社會が存在したが、豪族は安定的な支配秩序を確立することはできず、宣帝・元帝期以降、郡レベルの有力豪族を中心に社會の再編が進み、郡府が地方行政の中心となった。

全體としては、國家機構としては未成熟な部分が大きく、内史による縣支配など國家財政にあたる部分がなお弱く、公田や商人など少府管轄の帝室財政にあたる部分に大きな比重があり、それが前漢中期に郡縣支配とともに國家支配が確立していき、その背景には郡レベルの豪族層の發展があるという議論の枠組であるように理解できる。

三

第三章は算賦制をとり上げる。平中次氏が説く財産に應じた稅の實算は前後漢を通じて恒常的稅目としては存在せず、商鞅第二次變法により均等の入頭稅が成立し算賦制へつながっていくが、それは阡陌制と授田制による均等な小農民層の廣汎な創出に對應する。武帝期以降、階層分化の進展を背景として商工業者に課されていた臨時財產稅としての算緡錢がより廣範圍に課されるようになる。後漢に入ると、建て前上は均等課稅制は繼承されたが、實際の郷段階の徵收では、郷が大きな權限をもち、戸の資産の多寡に應じて差をつけて配分した。しかし漢代の郷里制とその共同體的秩序の崩壞の中で、後漢末・魏晉以降、戸等による賦徵收が正式なものとなっていくと述べる。やや圖式的ではあるが、在地社會の變動と稅制の變化をきれいに結びつけて描いた點で、本書の中でも鮮明なイメージを残す論である。

第四章では、戰國秦・漢代の諸徭役の形態区分とその性格を解明する。まず徭役には、(a)中央的徭役、(b)更徭、(c)更徭の枠外の雜役、(d)更徭の變役としての「大徭役」があった。このうち基本的な恆常的負擔である更徭(更卒)は、縣内において輪番(更)で毎年一ヶ月の就役が一般的方式であり、縣城などの築造や牛馬の飼育、隄防などの修築にあたり、成年男子が十二のグループをなして交代就役した。これは算賦と同年令層が負擔對象で、傳籍されることにより戸賦と徭使の負擔が生ずることは「法律答問」に見えている通りである。更徭は、本來縣により徵發されて縣内の勞役にあてられたが、景帝・武帝期に郡太守による徵發が本格化する。後漢の張景造土牛碑(南陽市出土)では更徭の申請がまず郡府になされ、そこでの決定が縣へ下達されており、徵發權は郡國にうつり、縣は執行機關となり、更徭の廣域化に伴ない雇人代役、免役錢徵收が進んだと述べる。元來は唐の雜徭に比すべき地方的徭役と中央的徭役との両面を併存したが、免役錢が一般化する中で中央的徭役としての性格をまずと論じ、あわせて(a)中央的徭役、(c)雜役についてもふれている。

第五章では、濱口重國氏の説をふまえ、まず秦・漢初における徵兵制の前提としての戸籍制と傳籍について諸説を整理し、傳籍は、對象は男子のみで、徭役・兵役の籍に傳けるの意味で、身長・年令(十五歳)が基準であり、「小」から「大」への書きかえは、郷で郷戸籍に登録し、それを縣で兵役・徭役籍に傳すと理解している。

また基本史料となる董仲舒の「漢書」の文章について諸説の理解を整理し、正卒(兵士)は男子の一定部分が選抜され、縣の常備軍において材官騎士や諸種の兵種に區分されるとし、また後漢

光武帝による軍備縮小と「正衛」の解釋にふれている。

第六章では、縣を單位とする地方軍の編成について、一定年令に達した男子は全て「傳」され、即ち兵籍に登録されるが(秦では徭役・兵役・賦の負擔年令は同じである)、現實には郡縣の定員數分だけが兵士に選ばれ、縣の常備軍において材官・騎士等の兵種に區分され、直接的には縣尉に統轄されたが、發兵權を含めた縣の兵權は縣令(長)によって掌握された。兵士は、老に至るまでの在役期間中毎年一ヶ月、縣に交替で上番して縣内の治安維持等にあたり、毎年年度末に郡の太守以下立會の下で都試という査閲をうけた。この他に、一年間郡に番上して郡常備軍となる正卒の義務があり、衛士あるいは成邊一年の義務とともに在役中の特別任務であった。以上は平時編制下の兵制であり、戰時編制下の征討軍の場合には、臨時徵募された兵士を加え、指揮系統・目的等を異にすることを述べている。平時と戰時のカテゴリーの導入によりこれは唐軍防令の基本的枠組である、新しい觀點を提供し、また常備軍における縣の役割を明らかにした點で貢獻であろう。

第七章は、漢代の「復」「復除」について、特定の税目免除の意味をもつものでなく、「のぞく、免除する」の意で使用する税役用語であることを明らかにする。宗室や吏、成年女子などの例について検討を加え、個々の免除内容を確定していく堅實な論考である。

四

秦漢の財政史研究は、戰前に加藤繁・吉田寅雄・濱口重國ら諸氏により、かなり高い水準が達成されている。本書は、戰後世代の、文革後の雲夢睡虎地秦簡などの新出土史料を用いての新たな財政史

研究として、山田勝芳『秦漢財政收入の研究』（汲古書院、一九九三年）と並ぶ收穫といふことができる。

山田氏の著書は、收入全般を包括的・體系的に實證し、財政收入全體を復原する、やや靜態的な制度史研究といえ（なお重近氏による書評が『東洋史研究』五四—三、一九九五年にある）、さらにまだ本にまとめられていないが渡邊信一郎氏の研究（『漢代の財政運営と國家的物流』『人文』四一、一九八九年ほか）が唐代までを視野に入れて財政の動きを追っている。それらと比較すると、本書の特色は、田租が扱われないなど包括的ではないが、税役を通じて古代國家の支配の實態と性質を明らかにしようとするところにあり、平板な財政史研究とは少し違ふところを目指している。

こうした手法は、恩師堀敏一氏の薰陶によるところが大きいかもしれない。堀氏は周知のように、先秦—唐代の廣い視野で、土地制度、身分制、家族制度、地方行政組織などの研究を通じて、古代國家の民衆支配の特質を解明してきた。ただ堀氏は税制に関しては、北朝から唐代の租庸調制について論じているものの、漢代については發言が少なく、高弟がその部分の研究を補い、秦漢帝國の支配の特色を明らかにしたわけである。

本書は、先行研究の諸解釋をふまえて史料を解讀していくというオーソドックスで堅實な實證研究であり、右でのべたように大きな成果をあげている。ただし古代史には常のことだが、史料の少なさと先行研究の多さとのために、ともすると先行學說の整理と批判に多くを費やし、主張がわかりにくくなる。本書は、基本的には個別考證論文の集積であるため、序章で古代國家の全體像と各章の位置づけにふれてはいるのだが、全體としての主張が評者には少しわか

りにくかった。著者の研究は單なる個別税制の制度史研究にとどまらないのだから、やはり、序章に本書のねらいを述べ、終章を設けて古代國家の支配の全體像を結論として記してほしいと思った（學位論文の審査をしていると同じようなことを思うことが多い）。

本書では、專制國家の基礎に、廣範な小農民の創出と個別經營を想定し、それを支える民間の小共同體が十分に機能をはたさないため、農民の再生産に國家が關與する「國家的共同體」機能が不可欠となり、それにより補完される。その場が縣およびその下の郷・里であり、これは縣單位の豪族社會とその支配の不安定さに對應する、と論じられる。こうした「國家的共同體」への再編は、同時に、國家による農民の個別人身の支配の創出であるわけで、なぜ國家が農民を統治できるか、さらに言えば、なぜ專制國家が成立するかという問いへの解答となっている。しかし一方で、前漢中期までは、公田や商人からの税などの内廷的部分の、國家の中で占める比重が大きく、郡縣制的税収はなお少なく、國家による縣への支配は弱かったとし、その後、豪族の成長と小共同體の分解の中で郡の統治機構としての機能が擴大していく、すなわち郡縣制的統治が擴大していくとのべ、國家統治の充實・確立を前漢の中期以降の時期にふみとっている。

以上は、なぜ農民が國家の統治に服するかの説明となっているが、しかし農民がなぜ算賦や徭役などの税を納めるかの説明としてはなお十分ではないように思う。それはやはり、その税を納めるのはどのような意味があるのかを考えなければならぬと思うからである。

そうした意味の説明としては、やはり宮崎市定「古代中國賦税制

度」(『宮崎市定全集』3、古代、岩波書店、一九九一年、初發表一九三三年)をあげざるをえない。租は、祖先などの祭祀に捧げる穀物であるが、助と稱する祭に關する力役に起源があり、税は生産物の一定割合を上納させることを意味し、のちに租と通用する。一方の賦は、貴族が軍事に従事する軍賦が起源であり、人民の地位が向上する中で春秋時代に兵役の上に武器調達などが加わり、やがて兵役免除とともに軍事物資納入として庶民にまで賦の負擔が及ぼされていった、と宮崎氏はのべている。評者は必ずしも宮崎説の結論の全てに左袒するものではないが(底流に流れる力役一元論は、少なくとも唐代では無理だと思う)、宮崎氏の議論は、やはり着想の鋭さというだけではまず、その新鮮さの基礎には一種の普遍的あるいは比較的思考があり、教えられることが多く、今日更めて考えなおす必要があるだろう。著者も、宮崎説を議論の前提にしてゐるのだが、そもそも多様な税目が存在するのはそれぞれ固有な意味と歴史があるからで、例えば兵役と徭役の關係など、各税目の意味を考へて税を納める理由を検討すべきだろう。その意味で、「税役體系」と題する以上、租についても、本来の宗教的意味があるのかどうかなど、一章を設けて論議してもらいたかった。とくに専制國家が成立し税制ができてくる過程であり、税の起源は重要な論點であるし、また一方で秦漢前期に國家支配が未熟だということと、徴税が行なわれることとの關係については一層の説明が必要だろう。

税の意味を考えるためには、納めた税がどこにいき、どのように使われるかを考えることが一つの手がかりであるが、そうした議論が本書に少ないのが残念である。縣倉を中央の内史と太倉とが管轄

していたことがのべられるが、一方で漢初には縣からの税收は少なかったとされているので、縣倉から中央へは運ばれないのか、關係がよくわからなかった。徭役も兵役も縣の中で運用されるのが基本であることから類推すれば、縣單位で運用されるのだろうか。そもそも國家ないし中央と在地との關係は、ただ縣の役割の大きさを言うだけでは十分ではないだろう。内史については、大櫛敦弘氏が論じているように、秦漢による中國全土の統一過程での直轄地と征服地という二重構造の中での直轄地統治の官という考え方も有用ではないだろうか。¹⁾その場合、内史は國家財政となるのか、征服地での税は中央に入ってくるのかどうか、太倉の機能や意味も含めて、教示をまちたいと思う。²⁾

内史と縣との關係の中核として上計がとり上げられ、著者はそこから縣の官僚の考課權を内史が握っていたことをのべ、また様々な帳簿が進上されたことにふれ多様な支配をとり上げている。ただし、上計の制が隋唐には朝集使と計帳使とに分離していくことを考慮すると、著者は前者の朝集使につながる系統を重視しているが、むしろ税制との關係では後者の計帳につなぐっていく意味を考えるべきではないだろうか。計簿は、その中心は人口統計であり(續漢志胡廣注に「縣戶口墾田・錢穀出入・盜賊多少」とある)、簡単にいえばそれで課口數、つまり租税負擔者數が確定し、人頭税である算賦などが上計の數に應じて納入されるということが重要なのではないだろうか。どうも副次的な帳簿にふれすぎて様々な行政報告ということになり焦點をしばりにくくなったように感じる。

税制の古代的特徴として、算賦に代表される人頭均額税制があげられる。人頭税(あるいは戸頭税)は、人民の階層分化が進まず民

衆が均質であることに對應するのだが、評者は、そうした均質性を前提としつつも、むしろある地域なり集團なりの成年男子の人数（あるいは戸數）がわかれば、それに應じて税額が決定され、徴税されるという程度の支配の段階に對應するように考えている。ある集團を外側から大難把にとらえ、その責任者に一定額の納税を請負わせるので、そのための文書が計帳である。のちの律令制では課役（唐では租庸調、日本では調庸雜徭）が人頭税であるが、日本では郡司が請負の單位となり、唐ではさらに下の郷（里正）がその單位となったのである。⁽³⁾その請負を支えたのが豪族の在地共同體支配であり、それゆえに地方行政組織の重要性があり、その上に國家がかぶさるようになる。いずれかの段階での請負（これを支配と言いかえてもよい）を考えなくては、前近代國家の徴税Ⅱ民衆支配ということはあるに思ふ。

著者は一三〇頁において、「後漢は國家の税制上、建前としては人頭課税の均等課税制をひきついたのであるが、實際の徴収においては郷が大きな権限を持ち、郷段階では負擔戸口數に基づいて算出された賦（人頭税）の總額を、戸の實產の多寡に應じて戸毎に差をつけて配分し、郷全體として平均して總額にあわせた、ということの意味しているのではなからうか。そして、そうした権限を持ち作業にあたる責任者が、郷の有秩（有秩畜夫）、畜夫や郷佐であったのである」ときわめて鋭い指摘をしている。著者はこれを魏晉以降の戸等による課税へ至る後漢の過渡的なあり方としてのべているが、これはしかし、古代人頭税の本質を剔出しているのではないだろうか。前漢においても郷は同様の一種の請負單位としての性格をもつていて、こうした郷の機能の上に縣が機能し、その上に國家が

のつていると考えるべきだろう。

人頭税の別の説明として、兵役を中心とする軍國體制下の國民皆兵的徴發を根據として想定することもあり、それは「個別人身的支配」の強力な民衆支配のイメージに結びつく。しかし、宮崎説のように、賦が軍役の代わりに差し出す金錢のことであるとし、賦の徴収の實態が右のようであるとすれば、兵役や力役は建て前としての説明にすぎないように思ふ。本書で明らかにされたように、兵役や徭役が縣内部での運用が中心であるとすれば、それは國家による強力な徴發というよりも、共同體的勞働の分擔という性格が強いように思われる。

以上、個々の考證については紹介以上のことはできないので、本書を読んで勉強しながら感じた、示教を乞いたい點を記して、あわせて古代の税制の特色について少し考えていることもべた。研究史に不案内なため、誤解やわかりきったことを述べたかもしれないが、ご寛恕を乞いたいと思ふ。

最後に、一つ氣になったことを述べると、本書には索引が附されているが、わずか三頁である。これではあまりに項目數が少なすぎるし、例えば倉律の項目は二八頁のみを挙げているが、實際には雲夢秦簡の倉律は他にも多く引用されているし、徭律などの律篇目についても同様であり、金布律は項目すらない。これでは索引の用をなしていない。コストの問題もあるかもしれないが、學術書としての根本的價值にもかかわるので、A5版で出版する以上は丁寧な索引をつけてもらいたいといこの場をかりて要望しておきたい。

註

(1) 大櫛敦弘「漢代三輔制度の形成」(池田溫編『中國禮法と

日本律令制』東方書店、一九九二年)ほか。

(2) 大櫛敦弘「秦代國家の穀倉制度」(『海南史學』二八、一九九〇年)が太倉と縣倉の關係について論じている。

(3) 評者は一九九九年唐代史研究會夏季シンポジウムにおいて、人頭税のとりえ方について若干の私見をのべた。また拙稿「唐西州高昌縣粟出舉帳斷簡について」(皆川完一編『古代中世史料學研究』上、吉川弘文館、一九九八年)も参照されたい。なお算賦の算という名稱は、加藤繁氏が指摘したように、人を數える、即ち人口調査をさしていると考えてよいのではないだろうか。

一九九九年二月 東京 汲古書院

A5版 三六〇頁 八〇〇〇圓

富谷至著

秦漢刑罰制度の研究

榎山 明

本書は、秦漢法制史の分野にあつて絶えず斬新な問題提起をおこなってきた富谷氏の、十餘年にわたる研究成果をまとめた論集である。全體の構成は左記の通り。

はじめに

第Ⅰ編 統一秦の刑罰

第一章 秦の刑罰〔Ⅰ〕文獻資料

第二章 秦の刑罰〔Ⅱ〕雲夢睡虎地秦墓竹簡

第Ⅱ編 漢代刑罰制度考證

第一章 刑徒墓の概要と分析

第二章 鈇左右趾刑

第三章 漢代の勞役刑——刑期と刑役——

第四章 漢代の財産刑

第Ⅲ編 連坐制の諸問題

第一章 秦の連坐制——睡虎地秦簡にみえる連坐の諸規定——

第二章 漢の緣坐制——その廢止と變遷——

第Ⅳ編 秦漢二十等爵制と刑罰の減免

第一章 史料に見える爵による刑罰減免

第二章 刑罰減免の實效性をめぐって